

# 火星

平成二十五年四月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

ぼた餅を提げきさらぎの峠越

梅林のかかりの風の硬かりし

梅の夜の向き合うてゐる琴二面

卒業歌とどく廐に馬のかほ

花辛夷散らさぬやうに墨打てり

家族なき吾におどろく菜飯かな

陸橋を力士の渡る臙かな

緋桃ひらきし御仏の大きかほ

青き踏むまさかの人に誘はれて

謝る子謝らぬ子に草の餅

# 太白星

闇汁の闇に海鳴り遠くせり  
燃えしふる松の丸太の淑気かな  
味噌蔵の暗し寒しと寒に入る  
酒樽の乾き切りをり返り花  
校庭にどんどの果ての空の青  
厄神の石段まろぶ小銭かな  
裏山の薪割る音の悴める

杉浦典子

浜口高子

けものらの寢息にしづむ龍の玉  
爛ぬるう仏と酌める風の音  
大年のさざ波立てる忘れ潮  
うしろより抜きゆく車窓まどの雪けむり  
北陸本線雪と乗り込む宮参り  
餅花を持つ子を肩に掲げゆく  
冬萌のつづきの海の波頭

# 火星作品

## 山尾玉藻選

國酒の濁りねぶりて年守りぬ  
神戸深澤鱻  
畝の燠ふんで待ちけり初日の出  
円墳に正面ありて飾縄  
羽織裏にあやしき一所花の内  
八幡奥田順子  
雪晴や振袖どつと出で来る  
松過の埠頭に鹿の来てをりぬ  
浅春の汽水の色を越えにけり  
寺田屋の奥伺うてゐる寒さ  
きさらぎやいつもの棚にいつもの鍋  
水槽の砂よりあぶく寝正月  
宝塚蘭定かず子  
鷺替の声のだんだんぬくもりく  
松風を帰つてゆける傀儡師

時かけて爛の一合宵えびす  
 夕凍の門辺に雑魚を篩ひをり  
 おさがりや万蓄蔵す男山  
 男山の風巻ききたり初筭  
 文具屋のおもちや箱めく松の内  
 松過の水たつぷりと埴の甕  
 地ひびきの残りし馬場の寒夕焼  
 寒念仏洞ヶ峠をみぎひだり  
 大山文子  
 淡海へ流れの細る寒施行  
 狩衣の風に孕める厄参  
 夕影の男山より風花す  
 柴垣の内より暮るる厄詣  
 し吹きつつボート馳せゆく恵方かな  
 宝塚山田美恵子  
 傀儡師大きな箱を神のまへ  
 コツヘルに滝の水柱を折りくれし  
 曾根崎に貝焼くにほひ冬の雨  
 さざなみの綺羅に追羽根乗りゆけり

# 選のあとに

山尾 玉藻

男山より 琅玕の 恵方道 深澤 鱧

京都八幡市の男山は美しい竹林で覆われている。作者は山頂の石清水八幡宮に初詣の後、竹林の碧に染まりつつ清澄な思いとなつて下山しているのであろう。しかもその径が恵方を指すのであるからいよいよ慶賀の境地となつたことだろう。

雪晴や振袖どつと出で来る 奥田 順子

一読、今しも成人式式典が終わつた会場から振袖姿の娘さん達が流れ出て来た景を思つた。晴れ渡つた銀世界に晴れ着の華やかな彩が撒き散らされるようで、眼を瞠るような美しい瞬間である。

鶯替の声のだんだんぬくもりく 蘭定かず子

鶯替は「替えましょ、替えましょ、嘘を真に替えましょ」と言いつつ見知らぬ人々とお守りを交換し合うのだが、最初は皆ぎこちない。その内それにも慣れて人々の声が和やかなものとなる。

文具屋のおもちや箱めく松の内 坂口夫佐子

カラフルで楽しい小物や思いがけないアイデア商品もあり、文具屋は時を忘れるほど楽しい場所である。なるほどお

もちや箱めく」の直喩に大いに納得である。穏やかな「松の内」がよい。

淡海へ流れの細る寒施行 大山 文子

辺りの草木が一切枯れ、水量の減つた川も音さえ立てない寒中、鳥獣たちの為に山路や畦に握り飯や油揚げを置き施す人々がいる。鳥獣たちは物影でそれをじつと見守っているのだろう。蕭条とした世界の中の温かな一景。

さざなみの綺羅に追羽根乗りゆけり 山田美恵子

追羽根を衝く快いひびき、羽根が垣根にひつかり母を呼ぶ我が声、全ては遥か昔のこととなつてしまった。今、新春の陽光と共に川は流れていく先、それはもつともつと遥かな所かも知れない。

大年の階段に置く箱の数 山本 耀子

床を飾る掛け軸、大きな水盤、重箱、祝膳、屠蘇道具など、新年を迎える品々の箱が押し入れや棚から下ろされ、とりあえずは階段に置かれる。箱の数ほど大年の主婦の忙しさが窺えるようだ。

初暦吊るや月さしゐることし 涼野 海音

初暦を吊るすと自ずとところが改まる。去年と変わりなく或いは今年こそはと真つ新の思いを籠めて予定を書き込んでいく。「月さしゐることし」とは、そんな清々しい思いから生まれた瑞々しい感覚である。(以下略)



# 恒星圈

同人 I

垣岡暎子

葦原の闇を均せり除夜の鐘  
盛り付けの余白たいせつ実南天  
軒下のけふの往来福寿草  
数へ日の氏神様の大はしご  
日の短か余り毛糸の玉の数

奥田順子

加古みちよ

エプロンの白きが恃み去年今年  
塗物を拭くころあひの関東煮  
飾り焚やがてたつぷり寒の雨  
ふくろふに左義長の夜のしじまかな  
枯木星ボール蹴つては拾ふ子よ

一筋の川幅となる枯芭蕉  
人波の城へつづける初景色  
見上げては歩きては青初御空  
日の庭にふくら雀の止まりやう  
日の庭の子らにこぼれて寒雀

長田擘子

河崎尚子

錦手の鉢に供ふる小豆粥  
冬至風呂半身浴にをさめけり  
みささぎの天空交はす寒鴉  
亡き夫の名をまづしるす祝膳  
七草のパック詰めなる街ずまひ

小松菜の畝にびつしり初明り  
振り向いて夫が待ち呉る初愛宕  
昼と夜の逆さの地より初電話  
松明の水面の鴨のふためける  
初雀伏籠の形の黄楊を出づ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

井上淳子

すこやかに子のまろびたる恵方道  
中吊りの笑顔あふるる初電車  
ちんどんのまづ詣でをり初戎  
大丸にコロツケ買ひし松の内

今澤淑子

恋猫の角あるやうな声なりし  
いろいろの祠寄り合ふ初詣  
春の灯へ大阪締めを反しけり  
寒禽は風にのりけり越天楽

藤田素子

大根おろし終へある夫の無聊なる  
手から手へ懐炉わたさる天満宮  
人声の遠のいてゆく枯蓮  
凍雲の覆ふ湖西に用のあり

田中文治

ふるまひの言葉少なに鱈大根  
方円にしたがふ水の初明り  
寒柝や坂の入りくむ屋敷町  
風花やインコの墓の幼な文字

緒方佳子

幕あひに柝の音の残る淑気かな  
探梅や寺の厨の水の音  
雪嶺の奥に雪嶺大糸線  
宵戎手打の声の中通り

西畑敦子

車椅子ゆつくり進むふくさ藁  
敷皮の熊に躓く初座敷  
寒月や姉の寝息のただしかり  
湯の激る大葉缶あり寒稽古

前田忍

目隠しの歯の美しき福笑  
碧天のしづくなりけり龍の玉  
獅子頭小さき咳をこぼしけり  
開け閉てに湯気の乱るる河豚雑炊